

『分権時代の議会の役割』北川正恭先生の講演会

平成 24 年 7 月 4 日 (水)

『分権時代の議会の役割』をテーマとして、早稲田大学大学院公共経営研究科教授 北川正泰氏をお招きして講演会が、午後 2 時 10 分から 3 時 45 分まで開催されました。

【講演の内容】

1.戦後の激動期から安定期への大変動期(革命)の歴史 ◇ 激動期は 1945 年～1960 年まで。『集中と選択』による吉田茂首相は「国民にお腹いっぱいのご飯を食べてもらうことである」という明確なミッション(使命)を打ち出し、軽軍備政策(軍事予算を減らす)、経国自由経済体制の確立を行いました。この時に、東側体制(ソ連の共産主義)か西側体制(アメリカ・イギリスの自由主義)の選択と集中(判断)で西側(戦勝国)と日米安保条約を結び、軽軍備で安保体制が軽くなった分をアメリカに頼って、この国の安全保障を確立したうえで、自由経済政策(経済第一主義政策)を選択することとなりました。

岸信介首相が 60 年の日米安保条約の改定に調印をしました(60 年安保闘争でした)。その後、安定期に向かうなかで、経済第一主義の中で傾斜生産方式(特定の重要産業への資金・資材を重点的に投入して生産を行うこと)を取り入れ、石炭重視政策(エネルギーを確保する政策)をとることになりました。そして、国策として製鉄に重視政策を行い『鉄は国家なり』といわれたように、当時の経済界は製鉄企業がリードして、国の安定期を迎えることになりました。

◇安定期は 1960 年から 1990 年まで。池田勇人首相はキャッチフレーズの『寛容と忍耐』による、「国民の皆さん、10 年間頑張って働いて下さったら私は皆さんの所得を倍増します。」といった『所得倍増計画』を描き高度経済成長政策を断行いたしました。現在の民主国家としては珍しく自民党が 54 年もの長期政権与党とし国民の期待に応え、その激動期から安定期への転換を見事成し遂げることとなりました。その象徴が、東京オリンピック(1964 年)や大阪万国博覧会(1970 年)でありました。

安定期を作るにはいろんな制度が制度を補完するといった、高度経済成長支える制度的に補完する体制が多くできました。その一つが、工業国家を作り、豊かな国にしよう。お金を沢山儲ける工業社会を作ることでした。工業国家を作るとは、人や機械をうまく使って機能する社会であり、機械をたくさん買うことが勝ちということになり、資本主義社会となって資本を集中させ、また人やものを一か所に集めてるということになります。工業社会を作る制度的補完体制の工業社会をつくりには、中央集権体制がどうしても必要であった。そのようなことで、明治以来、戦後も中央集権体制が確立していきました。

機械に使われやすい子どもを教育の中でどう作るか、各教育の大命題となって、それで偏差値教育というものが教育の中に入って、いかに「機械に使われやすい従順な国民を作るか」という教育が補完され、工場が見事に機能して世界一の成長率を誇る国家ができたのです。

【戦後教育】は、知的教育・偏差値教育が中心となり、その教育がよかったかどうか、今問われています。その教育を受けてきた子どもや大人の約 70 万人は社会不適合（引きこもりなど）となっています。また今、200 万円以下の低所得者の皆様方が 1200 万人とも 1300 万人ともいわれる格差社会となっています。格差社会がそっくり教育格差に繋がり、親の所得が子どもの教育に大きく影響を及ぼすという状況を一体どう直すかという問題があります。

戦後は、親が貧乏なら子どもも貧乏という社会ではありませんでした。親が貧乏でも子供だけは一生懸命教育を受け、本当に平等に出世できる、お金を儲けができることのできる社会を作ったからよかったのです。機械に使われやすい入札教育、優秀だけではなく『人としてどう生きるか』或いは『人間として温かい、そして公共的な顔とも配慮ができる教育体系』に変えないと 70 万人の社会不適合或いは家族崩壊を直すことが成熟社会の我々の重要なことだと思います。

【1991 年バブル崩壊】 失われた 20 年といわれます。国債発行に頼る、自分たちの都合で決める『大衆迎合の政策』をとることとなりました。

1991 年バブル崩壊しましたが、吉田茂首相の軍事大国を経済大国にしたように切り替えが必要でありましたが、その当時の指導者も政治家も経済界もその体制をそっくり入れ替えると自分の首が飛ぶということで、今日まで愚図愚図してきて『失われた 20 年』が正にそのものです。1991 年 バブル崩壊後は、まだ財産があったので歴代内閣は国債発行して何とかこの国を持たせてきました。しかし、多数決の民主主義の政治は、本質的にポピュリズム（大衆迎合）を持っていますから、なかなか厳しい政策が取れないということです。自民党がしようと思ってもできなかった。

【2009 年政権交代】 戦後体制を変える改革する革命であり、（民主主義で日本のレベルを上げるための 1 票の革命であった）必然的な改革により政権交代が、そういう流れによって起こりました。

民主主義は本当にポピュリズム（大衆迎合主義）であり正しいことが正しく票が入ることは難しいのです。多数決での審議ではありませんから、その時のジェラシーや回りだとか自分の都合でいく制度です。しかし、独裁者を作ることも、独裁者をやめさせることも 1 票で変えられるから物凄く尊いということになります。

- ◆ 大改革 体制そのものから変える制度的補完体制、中央集権で工業による高度成長でこの体制をひっくり返して、全く体制そのものから改革すること、別の体制を作らなければいけなかった。この革命期が今だということです。

【地方分権の流れ】1995年に地方分権推進法ができ、5年を要して2000年に地方分権一括法において法律（個別の法律470本）改正されて、中央集権体制は法律的に終息することとなりました。

しかし、人々の意識や制度・組織がそのまま残っていましたので、なかなか耐えきれなくて今日苦労しています。地方分権のことですが、もう法律的には戻らないことをご理解してもらいたいです。

自公政権の時に賢い人がいて、行政の権限委譲がせいっぱいで財政権限移譲したら国会が持たないので、2002年と2003年に5年かけて財政移転させるというのが、『三位一体改革』でありました。

国は、地方の皆さんや議会・首長さん方に地方交付税や補助金を下げさせてください。その代わりに自主財源をたっぷり上げますからといった『三位一体改革』でありましたが、中央集権で中央に権力がよってしまっていて、中央は強いですから失礼ですが、地方は騙されてしまいました。これが、三位一体改革となりました。極端な言い方をしますと、国の財政再建に地方が協力させられたといえなくもありません。「これだけ地方交付税が減らされたら首の振りようがない、困ったね」という背景（裏事情）があって、市町村合併が一挙に進むことになりました。そして、全国の3400の市町村が1700となったのであります。

【財政健全化法】北海道夕張市は国のエネルギー政策により11万人の石炭産業の市でありました。その後、エネルギーが石炭から石油に代わり夕張市は観光都市となりましたが、失敗し人口も1万1人となり財政破たんすることとなりました。2005年、竹中平蔵総務大臣は国にお金がないので夕張市がつぶれたのは勝手ではないかとして、財政が危なくなったらイエローカードを出してやろうと、夕張市は絶好のネタとなりました。これが市町村合併を推進することとなりました。いいか悪いかに係らず、体制的に変わらなければならなかったことには、「国は面倒をみんなせん。あなた方で勝手にやりなさい」として、『地方財政健全化法』が作られました。

【第2次地方分権推進法】基語は『地方政府の確立』でありました。今日的に地方は政府の公共の下請け団体（地方公共団体）でした。

しかし、この法律により自己決定・自己責任による『自治体行政権の確立』最も重要なこととなりました。自治体行政権も自治体財政権も自分たちの地域で作って、自分たちが法律を作って決めなければなりません。

『自治体立法権』は自治の立法を自分たちの議会や自分たちの執行部が条例制定を自分たちのルール法律で決めていくものです。

憲法では国民の主権や国家の主権はあるが地域に主権はありません。そこで、民主党の元鳩山首相のいった「地域主権」はおかしいということになり「地域主権改革」と改めました。

平成 23 年 6 月国と地方は対等の関係となり、上意下達はなくなり指示や通達を聞く必要はなくなりました。そして、地域にあった社会づくりや条例化により、地域主権改革は確実に進んでいます。

町長部局（執行権者）だけではなく、決定権者・議決権者の議会が最も重要であり、新しい発想に切り替えるといった『地方分権の制度的補完を早く作り上げること』です。

【北川正泰先生のアドバイス】『国を変えるのは、地方からの運動を行っています』。

『地域を変えるのは、議会からです』。『議会がしっかりしたところは、首長は必ず変わります』。『議会で議論することが、町を変える起爆剤となります』。『新しい時代を切り開くのが議会です』。議会が目覚めて、議会からこの地域を変えていくことが、真の力のある自治体ができると思います。

『議会が変われば地域も変わる』、『新しい勇気を作るのが議会である』、『チェック機能だけではなく、立法機能を活かすこと』、『議会基本条例を作ること』、『議会事務局の強化』などその他、議会に対する多くの期待を込めた熱の入った講演でした。今後は更に、先生のお話を糧に頑張っていきたいと考えております。